

Title	費信の見聞した十五世紀初頭の南海漁事：漁業資料としてみた「星槎勝覽」の價值
Sub Title	On the fishing of the Pacific and Indian Ocean in 15th century informed by Fei Xin (費信)
Author	可兒, 弘明(Kani, Hiroaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.33, No.1 (1960. 12) ,p.59- 70
JaLC DOI	
Abstract	<p>"Fei Xin " (費信) was a Mussulman in Ming Dynasty, who was sent abroad several times as one of the interpreter of "Cheng Ho" (鄭和), an envoy of the Imperial China. Based on his observations of foreign land, he wrote a book entitled "Xing Cha Sheng Lan" (星槎勝覽), the preface of which was dated A. D. 1436. His book abounds in comments of salt-making, saying, "they boil down the brine and get salt "(煮海爲鹽). But he says nothing about evaporation of sea water under the fiery rays of the tropical sun. Salt-making might be the important way of sustenance of daily life for the southerners. Exactly the same information is given in "Dao Yi Zhi Lue" (島夷誌略), a work of 14th century by "Wang Ta-yuan" (汪大淵). He has the following discourse under the heading of Tanjang Datu (都督岸) of Burneo. "Prohibit the people from boiling down the brine to get salt during the first three days of New Year". I think that the salt-manufacture was not only purely economic pursuit but also had it's social and religious meaning. Treating of the dugout canoe, the comment is so piecemeal as to be not worth special mention for us. About ambergris which was nightly prized as one of the exotic perfume in Sung and Ming Dynasties, he explains as follow,"Steering the dugout canoe, the inhabitants go to Bras isl. (龍涎嶼) where they collect ambergris". Moreover, he records the names of place which is famous for it's production of ambergris. Amongst them, we can name al-Ahsa, Zafar, Jubba, Brawa and Maldives. In refrence to net fishing, only the fragmentary informations are found in his book. "The Natives of Cap Varella, Malacca, Samudra and Nicobar catch sea fish by using net". But he does not explains anything about detailed resources. Merely under the heading of Samudra, he says "To net fish is their daily life; fishermen get into canoe at dawn, setting sail on open sea, homeward bound at sunset ". Judging from this passage, net fishing was obserbsd by the whole members who were obliged to live together. As to the fishing for pearls, there are several places of production such as Ceylan, Sulu, Bangala, Mecca and Ormuz. According to hiscommentary on Ceylan (錫蘭山國), the book gives the following imformation; "there is a sea where the pearl oysters congregate; they use to net oysters; the pearl oysters are put into the pond to expedite the process of rotting", (其海傍有珠簾沙。常以網取螺蚌。傾入珠池內作爛淘珠). The fame of Ceylon pearl banks goes back in the T'ang (唐) or Sung (宋) period for the Chinese. Statement concerning the fishing for pearls in Ceylon is also found in another Chinese sources. "Wang Ta-yuan", author of "Dao Yi Zhi Lue", has the following explanation. "The diver holds a stone to aid him in his rapidly descent to the bottom, where he rakes the oyster by hand and put them in the basket" (繫石於腰放墜海底。以手爬珠蚌入袋中). Pearl fishing, anywhere and anytime, depends not so much on net as on divers. Fei Xin's information, saying "To net the pearl oyster (以網取螺蚌)", is not correct. Perhaps he confounds the net with the basket in which the pearl oysters are brought to the surface. It is also misrepresentative that tells us "Oysters are placed into the pond". Chau Ju-kua (趙汝■), in his Chu Fan Chi (諸蕃志), in 1225, has the following discourse on this subject under the heading "pearl". They make a pit in which the pearl oysters are piled. At the end of a month, knead and wash the refuse to find the earl. According to Woolf, B. S., in Ceylon to-day, to expedite the process of rotting, so that the pearls may be more easily extracted, the oysters are piled into dugout canoe and covered with matting for a week. Wang, in his work, has a explanation as follow. "The oysters are piled into canoes. These canoes heel over under the weight of pearl oysters. Shipping the cargo-pearl oysters, government officers in his boat escort them. At the end of several days little is left except slime, pearls, shells. Then they wash the refuse in which the pearls are imbedded", (以珠蚌傾舟中。既滿戴則官場週回皆官兵守之。越數日候其肉腐爛則去其殼以羅盛腐肉旋轉洗之。則肉去珠存). The representation expressed in Dao Yi Zhi Lue is shared by Fei Xin in his work. When he cites the passage from Zhi Lue, he mistakes that "boat heels under the weight of pearl oyster (以珠蚌傾舟中)" for "pearl oysters are put into the pond" Beside, according to Woolf's report, an Arab diver in Ceylon fishery wears a nose-clip when diving, the Tamil hold his nose with finger and thumb. The only Chinese author who has treated of this kind of method is Chau Ju-kua, saying, "they fill their nose and ears with wax" (以黃臘塞耳鼻).</p>
Notes	

Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0059">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19601200-0059</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 費信の見聞した十五世期初頭の南海漁事

(漁業資料としてみた「星槎勝覽」の價值)

可<sup>か</sup> 兒<sup>に</sup> 弘 明

明代に太監鄭和の南海遠征のことがあつてから、支那人の南海に關する知見は大いに進んだと思われる。その一つのあらわれとして南海の地誌がつくられるようになったが、鄭和遠征それ自體がこれまた南海の地誌を生んだ。一つは費信の「星槎勝覽」であり、他の一つに馬歡の「瀛涯勝覽」をあげることができる。著者はいずれも當時の支那回教徒であつて、通譯として遠征に加わつたと稱せられている。この兩書は、元代の一三四九ないし一三五〇年ごろ成立したと思われる。「島夷誌略」や、あるいは宋代における「嶺外代答」・「諸蕃志」・「桂海虞衡志」とならんで、いわゆる西力東漸以前の南海諸國の事情を伝える好資料と目されている。民族學の面からみてインド文化・イスラム文化・漢文化の影響をうけながらも、なお基層文化をそれぞれ失わずにとどめていた時代の南海の姿が、かなりの興味をひきおこすのである。こうした價値は相當高く評價されてよからう。

しかし實際に利用する時、これに十分の検討を加えねば却つて誤つた結果におちいるのであつて、たとえば藤田豊八博士が「大小葛蘭考——星槎勝覽の價値」(東西交渉史の研究 南海篇)において、「星槎勝覽」における「島夷誌略」の

抄襲綴拾や臆見附加の事實を指摘されたごとく、また内田幹之助氏が「南海に關する支那資料」において「星槎勝覽」の淡洋・龍牙門・彭坑・吉理地悶・勃泥・蘇祿國の諸條に、同じような「島夷誌略」の抄襲、綴拾のあることを述べられているごとくである。

「星槎勝覽」はこうしたわけでその記述の一部が既に不評判なのであるが、いま一つの別な點つまり内容のとぼしいことでも致命的な弱點がある。以下、漁事に關する記述によつてそれを概觀するとしよう。

「星槎勝覽」の著者費信は、字を公曉といふ、その祖は吳郡崑山の民であつた。前述のように支那人回教徒で、二十二才の時えらばれて通事となり、太監鄭和に従つて諸外國に赴いた。七回にわたる遠征のうち費信が實際に従事したのは第三回（永樂七年十二月より同九年六月）、第四回（永樂十年十一月より十三年七月）、第七回（宣德五年十二月より同六年）および第三回と第四回の間におこなわれた永樂十年の奉使少監楊敕によるベンガル招撫、以上の四次にわたつていゝる。まず十五世紀初頭の見聞といえよう。この間みずから實見した諸國を前集に收め、傳聞に屬する諸國を後集として「星槎勝覽」二帙を集成した。「島夷誌略」に於けること約七十餘年、「諸蕃誌」の成立後ほぼ二百年を経ていた。さて、この「星槎勝覽」收載の南海諸國のうちから、漁業に關係する部分を左に抄出し、事項ごとに整理して、もつてその記事がいかに簡略きわまりないものかを示すとしよう。

### (1) 海水鹽の採取

費信がどのような興味をもつて記録したかはこれを知るべくもないが、比較的多く記述されたのは鹽の産地である。

近年におけるインドシナの例に照らしてみてもわかるように、大衆食糧は米と獸肉魚介を主とする動物性窒化物であ

り、これが調味料としては一部に香料および大豆醬油も用いられたが、大抵は魚より製した魚醬 Nuoc-man と魚の鹽漬である。他のアジア季節風帯の民衆も同じように賞用する關係上、漁獲物の鹽藏または鹽處理は、東西洋（とくに南海）の一つの地域的特色ともいえ、インド洋方面の乾燥魚の存在とともに今後にのこされた大きな研究分野である。

ともかく海水を煮つめて食鹽をうる漁業が各地に盛行していたことは當然のことであるが、「星槎勝覽」に擧げられた順に地名をひろつていくとする。

占城國、すなわちジャンパの條下に「以<sub>レ</sub>煮<sub>レ</sub>海爲<sub>レ</sub>鹽」といい、さらに「一國之食、魚不<sub>ニ</sub>腐爛<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>食」と述べている。安南の鹽漬魚は住民がこれを愛好し、食膳に上すのであるが、その臭氣嘔吐を催させることにおいてとうてい外國人の耐えうるところではないので、これを見聞した費信は、占城人は魚が爛爛しなければ食べぬものであると考えたのであろう。こうした鹽漬魚の關係からも多量の鹽の需要があつたはずであつて、されば「煮<sub>レ</sub>海爲<sub>レ</sub>鹽」を彼等が行うのである。湿度過多の季節に海水鹽は自給できぬし、雨期もまた生産をはぐまれるが、インドシナではラオス諸州の岩鹽をのぞいてことごとく海水鹽に頼つてきた。とりわけ東京、北安南、中部安南、交跡支那の鹽田は今日でも大規模なものが存在しているが、「星槎勝覽」にもそれをうかがうことができる。即ち眞臘國 Kanboja、暹羅國 Siam に關する記事の中にも海水を煮て鹽となす、という一事が記載されている。

煮<sub>レ</sub>海爲<sub>レ</sub>鹽という簡略な表現によつて海水鹽採取の事實が示されている地域は、上述した占城、眞臘、暹羅三國のほか、

蘇門答刺	Samudra	龍牙犀角	Lenkasuka	東西竺	Pulo Aor	龍牙善提	Langkawi
彭坑國	Pahang	琉球國	Formosa	三島	Philippine	麻逸國	Mindro

假里馬打 Karimata 重迦羅 Jangala 渤泥國 Burneo

など南海各地にわたるのであるが、そのいずれについても製鹽法の具體的記述が備録されていない。いわゆる當時の西洋諸蕃のうち、卜刺哇國 Brawa で費信は鹽池に樹枝を投じ鹽の白い粉を吹かせる方法に接し、これを

有<sub>二</sub>鹽池<sub>一</sub>、但投<sub>二</sub>樹枝於池<sub>一</sub>、良久撈起、結<sub>二</sub>成白鹽<sub>一</sub>、食用

と筆にとどめ、その詩に「鹹水結爲鹺」といつているくらいに興味を寄せている。おそらく南海の製鹽法は支那明代のそれと類似し、ことさら特記するほどのものがなかつたからであろう。いずれにせよ、東西洋を通じて擧げられているおびたぐしい土産・貨物のなかに鹽が特記されていないことは、南海の鹽が自給自足、あるいは生産量が需要量を上廻つても、下廻つてもそう大した量でなかつた事情を間接に示している。

## (2) 獨 木 舟

ここで漁業に關して當然深いつながりを有した獨木舟についてみると、スマトラ、ブラス島(龍涎嶼)、ニコバル島(翠藍嶼)、アルー國(阿魯國)などの記事に、獨木舟ないし獨木刳舟の字句がみうけられるが、われわれが獨木舟について知りたいと思うさまざまのことに關して、「星槎勝覽」の著者費信は貝のように口をつぐんでいるのであつて、これに一片の期待をよせることすら困難である。

## (3) 龍涎香の採取

龍涎香すなわちアンバー・グリスの採取はスマトラからインド洋諸島にその記載があるが、既に前島教授の研究があ

るので記述を省く。

#### (4) 網 漁 業

網漁に關する具體的な記事を拾いあげてみると左のようである。

まず靈山 Cap Varella に星散して居住する民は「結<sub>レ</sub>網爲<sub>レ</sub>業」しており魚蝦を海内に求むと記している。靈山は占城の山地と連接する峻嶺で、安南富安省 Phu-Yen の臨海地帯であり、明代の販船は必ずここに寄航して飲料水を積込んでいたようである。その關係からか彩色船を水に流して人船の災を禳う行事のあることが「島夷志略」にみえていゝる。田土が肥え「耕種一歳二收」の土地であつたと同時に、網を用いて漁業を行い、それを生業とする住民のあつたとがわかる。

次いで滿刺加國すなわち Malaka の國人も、「以<sub>レ</sub>淘釣<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>溪、網漁<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>海」とあるが、紀錄彙編本には「民淘<sub>レ</sub>錫網<sub>レ</sub>魚爲<sub>レ</sub>業」とあり、前者の方が明解である。これに従えばマラッカ方面の住民に網漁をもつて生業としていた漁民のあつたことも知れるのである。

スマトラ方面について、蘇門答刺國の傍海村落にやはりフィツシヤーマンとして生業を立てゝいるものを見聞し、民下網<sub>レ</sub>魚爲<sub>レ</sub>生、朝駕<sub>ニ</sub>獨木刳舟<sub>ニ</sub>張<sub>レ</sub>帆而出<sub>レ</sub>海、暮則回<sub>レ</sub>舟。

と記録にとどめている。この一文にわれわれは最もテイピカルな南海漁民の姿を求め、伊映畫「最後の樂園」のワンカットを想起させるのである。馮承鈞はこの蘇門答刺國を今のスマトラ島西北パセ河沿岸に比定している。さらにインド洋に出てからの見聞では、翠藍嶼つまりニコバル島民は芭蕉・椰子・魚蝦だけで生活しており、その魚

蝦は「惟在<sup>レ</sup>海網捕<sup>ニ</sup>漁蝦<sup>ニ</sup>」、海に出て網を下して捕採するのだと記している。

錫蘭山、セイロン島の部分では螺蚌を網でとることを記し、漁業に關しては「星槎勝覽」中もつとも注目すべき記述がなされているが、これについては後述する機會もあろう。この他溜洋國マルデーヴ群島は「不<sup>レ</sup>識<sup>ニ</sup>米穀<sup>一</sup>、但捕<sup>ニ</sup>海中魚鰕<sup>ニ</sup>而食<sup>一</sup>」とのべ、魚鰕をもつて主食としてゐることを記録しているが、漁獲法にまで記述が及んでいない。ただ西曆一三四三年より翌四四年八月ごろまで同島にあつたイブン・バットウータの記録を參考にしてみると、鰕釣のように思われる。バットウータ旅行記の唯一の邦譯書である前島信次教授の「三大陸周遊記」に、

スワイドから黍に似たものがとれるほかは大體穀物はないので、島民の主食はクルブル・マースという魚ややしの實である。この魚の肉は赤くて脂がなく、羊肉に似た臭がする。これを釣ると、四つ切りにし、ざつと煮てから、やしの葉の籠に入れて燻製にする。よく乾いてから食べ、またインド、シナ、ヤマン等に輸出する。

とあつて、「星槎勝覽」の簡略さをかなり補つてゐるのである。くどいようであるが、東洋の鰕節に關する文献になるので、フサインの英譯を示しておく<sup>註</sup>と、左のようである。

In all these islands there grows no grain; only in the Suwaid region is to be found a kind of grain which resemble 'anli' and is exported from there to Mahal. The food of the inhabitants is a fish which is simular to Iyrūn and which they call galbalmās. Its flesh is red and has no grease and smells like mutton. When it is caught the fish is cut into four pieces, cooked a little, placed in baskets of palm leaves and hung over a smoke. When it is thoughtly dry it is eaten. It is exported from the Maldive islands to India, China and Yemen; it is called galb-almās.



ともかく明記されていないが、網漁ではあるまいと思われる。インド洋ではアラビヤおよびアフリカ方面に關して二、三の記載がなされているが、とくに重要とも思われないので、再び南海諸地域に筆をもどそう。

「星槎勝覽」後集で麻逸國即ちミンドロ島 Mindoro isl. および假里馬打 Karimata の土産に玳瑁が擧げられているが、これまた捕採法については記述が及んでいない。ただルソン島南方洋上の三島 Calamian, Palawan, Busu-anga の條下には網漁に關する部分がわずかにあつて、「以<sub>レ</sub>網魚<sub>ニ</sub>於海<sub>ニ</sub>、織<sub>レ</sub>布爲<sub>レ</sub>業<sub>ニ</sub>」とのべられている。

### (5) 眞珠 漁 業

眞珠の採取についての記述は錫蘭すなわちシーランないしセイロン漁場と、蘇祿國すなわちスールー群島漁場、榜葛刺すなわちベンガル漁場、さらにペルシヤ灣漁場を示すと思われる天方國すなわちメッカおよび忽魯謨斯オームズの五地域が擧げられている。しかしながら

錫蘭山國 其海榜有<sub>ニ</sub>珠簾沙<sub>ニ</sub> 常以<sub>レ</sub>網取<sub>ニ</sub>螺蚌<sub>ニ</sub> 傾<sub>ニ</sub>入珠池<sub>ニ</sub> 作<sub>レ</sub>爛淘<sub>レ</sub>珠爲<sub>レ</sub>用而貨也

蘇祿國 採<sub>ニ</sub>眞珠<sub>ニ</sub> 色白絕品 珠有<sub>ニ</sub>徑寸者<sub>ニ</sub> 已值七八百錠 中者二三百錠 永樂十六年其酋長感<sub>ニ</sub>慕聖恩<sub>ニ</sub> 乃挈<sub>レ</sub>妻携<sub>レ</sub>子涉<sub>レ</sub>海來朝進<sub>ニ</sub>獻巨珠一顆<sub>ニ</sub> 重七兩五錢

榜葛刺國 地產細布・撒哈刺……珊瑚・眞珠……

天方國 地產金珀・寶石・眞珠・獅子……

忽魯謨斯國 產有<sub>ニ</sub>眞珠<sub>ニ</sub>

というように、實際の記録ははなはだ簡單である。しかも蘇祿國および天方國は後集におさめられている關係上、「後

集者採輯傳譯之所實也」であつて親しく實見したものではない。錫蘭山國・榜葛刺國・忽魯謨斯國は前集の部分にあるので、「前集者親監目識之所至也」(星槎勝覽序)であるにもかかわらず前掲のごとく具體性を缺いており、しかも錫蘭山の條は明らかに「島夷志略」の襲用と思われるのである。

以上五科目にわたつて概観してきたが、これが「星槎勝覽」に記述された南海(一部にいわゆる當時の西洋も加わつている)に關する漁業のすべてである。

同書成立の事情からして漁業(狩猟についても同じことがいえるのであるが)に關する多くの記録をもとめることが困難であろうけれど、これをそれ以前の同類文献にくらべるとき、物足りなさを感じることはやむをえない。

## (6) 考 察

既にわれ／＼は宋の淳熙二年(一一七五)成立したと思われる范成大的「桂海虞衡志」によつて南海に關する豊富な知見を與えられた。著書が桂林において傳聞した資料にもとづいて輯成されたのであるが、魚貝に關しては、その「志虫魚」において

珠・車磔・蚰蛇・螻蛄・蜈蚣・青螺・鸚鵡螺・貝子・石蟹・鬼蛭蝶・黑蛭蝶・嘉魚・蝦魚・竹魚・天蝦

(\*印をのぞいたものが魚介類)

の記述があり、とくに合浦の眞珠採取に當時の眞珠生成論とでも稱する説が示され、さらに「志蠻」には水上生活の蟹に關して百語から成る記述もなされている。しかるに「星槎勝覽」では一個の魚介名を見出すことも困難なのである。

同じころ、正確にのべれば南宋の孝帝の淳熙五年(一一七八)周去非という人の著した「嶺外代答」、あるいは南宋

の理宗の寶慶元年（一二二五）にあらわされた趙如活「諸蕃誌」上卷—志國 下卷—志物においても、漁業に関するオリジナルな資料が各所におさめられている。

元代に至り、汪大淵が往訪目睹した南海諸國に關する「島夷誌略」が現れ、われ／＼の知見は一層廣くなつた。成立は一三四九年ないし五〇年といわれているが、當時の漁業に關してまず満足しうる資料が各所に認められ、同時に登載された國々もまたその數を増すに至つたのである。試みに「民煮<sub>レ</sub>海爲<sub>レ</sub>鹽」の海水鹽に關する地名をあげてみると

澎湖・三島・麻逸・無枝拔・交阯・占城・民多朗・眞臘・丹馬命・日麗・麻里嚕・遐來物・彭坑・吉蘭丹・羅衛・羅斛・東冲古利・蘇洛鬲・針路・淡邈・尖山・八節那間・三佛齊・淳泥・明家羅・龍牙犀角・蘇門傍・舊港・龍牙善提・班卒・假里馬丁・文老古・東西竺・班達里・高郎步・東淡邈・大八丹・加將門里・波斯□・撻吉那・千里馬・須文那・放拜・大烏爹・萬年港・馬八兒嶼・俚伽塔・蒲奔

など、太平洋・インド洋の四十八カ國にわたり、「星槎勝覽」のあげた十四カ國をはるかにしのいでいる。そればかりか、ボルネオ西岸南部の一岬 *Tanjung Datu* を指すと思われる都督岸の條下に、鹽づくりの禁忌に關する習俗のあることを示し、

民間每以<sub>ニ</sub>正月三日<sub>一</sub>長幼焚<sub>レ</sub>香拜<sub>レ</sub>天以<sub>ニ</sub>酒牲<sub>一</sub>祭<sub>ニ</sub>山神<sub>一</sub>之後 長幼皆羅拜<sub>ニ</sub>於庭<sub>一</sub> 名爲<sub>ニ</sub>慶節<sub>一</sub>序不<sub>レ</sub>喜<sub>レ</sub>煮<sub>レ</sub>鹽とのべているなど、比較にならぬくらいの差があるのである。

「島夷誌略」はなおいくつかの注目すべき資料を持つてゐるが、例えば肉荳蔻の産地として知られた今の *Banda Isls.* (文誕) の島民は日中の強烈な暑熱をさけて夕刻より漁獵に出ることを物語り、蘇祿現今のスウル—群島産眞珠のかなり詳しい價値を論じ、その他マルディ—ヴ群島の仄子についての記述、あるいはボルネオ東南岸蒲奔 *Tana Bumbu*

での

以ニ木板ニ爲レ舟、藤篾固レ之、以ニ棉花ニ塞ニ縫底一、甚柔軟隨レ波上下、蕩以レ木而爲レ槳、未ニ嘗見ニ損壞一  
という構造船の萌芽を示す例など、いづれも注目するに價しよう。マルコ・ポーロあるいはマゼランの紀行にひつてき  
するというもあながち過言ではあるまい。

「誌略」と「星槎勝覽」の差は、セイロン眞珠漁業において最も明瞭に示されている。既述のように、「星槎勝覽」  
の錫蘭山國の條下では

其海傍有ニ珠簾沙ニ常以レ網取ニ螺蚌ニ傾ニ入珠池内ニ作レ爛淘レ珠爲用而貨也

の記述がなされているのであるが、これは「誌略」の第三港、藤田豊八博士の「島夷誌略校註」(雪堂叢刻一〇)によれ  
ばセイロン島マナール灣沿岸の Puttalam 港付近に比定されるが、ともかく第三港に關する

去比港八十餘里、洋名大朗、蚌珠海内爲ニ最富、採ニ取之ニ際、酋長殺ニ人及十數牲、祭ニ海神ニ選レ日集ニ舟人ニ採取、每舟  
以ニ五人ニ爲レ率、二人盪槳、二人收綆、其一人用圈竹匡、其袋口懸ニ於頸上ニ。仍用收綆、繫ニ石於腰ニ放ニ墜海底、以レ手  
爬ニ珠蚌ニ入ニ袋中ニ。遂執レ綆牽制、

其舟中之人收レ綆、人隨レ綆而上纜以ニ珠蚌ニ傾ニ舟中ニ、既滿載則官場週回皆官兵守レ之、越ニ數日ニ候、其肉腐爛則去ニ其  
殼ニ以レ羅盛ニ腐肉ニ旋轉洗レ之、則肉去珠存、仍巨細篩閱ニ於十分ニ中官抽ニ一半ニ以ニ五分ニ與ニ舟人均分、若夫海神以取レ之  
入水者多葬ニ於鰐魚之腹ニ

云々という記事を抄襲し、しかもこれを誤解して自分勝手なものにしていることは明かである。

費信のいう網を以て螺蚌をとるとするのは、ダイバー達が首からかけている網袋であつて、螺蚌をとるのは潜水作業

によつたのであろう。眞珠貝だけはいかにしても網具をもつてしては採取しえない。また費信がそれにつづけて貝を池中に傾入し、これを腐爛せしめ珠をとるというのも臆測の一例で、「誌略」の文をちぢめる時に誤りをおかしたのであろう。「誌略」は数日経て腐爛した母貝から珠をとりだすことを記しながらも、その場所は明示していない。後年におけるセイロン島では大量の Pearl oyster がくさるまで放置しておく圍いを設け、これを totties とよんでいるが、池中ではない。

「星槎勝覽」のセイロン眞珠漁に關する部分は右にのべたように信をおきかねるが、「島夷誌略」の記述はかなりの正確さをそなえている。一九二五年同島の眞珠海棚を訪れた B. S. Woolf は、翌年の The national geographical magazine XLIX-2, に *おんじゅ* Fishing for Pearls in the Indian Ocean, と題するルポルタージュを寄せているが、それに示されたセイロン島眞珠漁業を「誌略」のそれとくらべてみても、漁に先立つて海神を祭るために牲をささげる習俗（島夷誌略）や、舢の高い採取船（英領時代 dhoneys とよばれた）の乗員が五人以上になったこと、分配比率が官收 $\frac{2}{3}$ 、潜水夫 $\frac{1}{3}$ の割合になつたことなどをのぞけば、操業から摘出、選別にいたるまで全く同一であることがわかり、改めて「島夷誌略」の資料的價値を認識させられるのである。

ウールフ氏が附圖で掲載した寫眞は、一九二五年ごろのセイロン眞珠漁業を示すが、潜水夫がノーズ・クリップを用いている。ウールフ氏の記述に従えば、これを用いるのはアラビア方面からの出稼漁民だけである。タミール人はクリップを用いず、人差指と親指を用いて鼻口を守るといふことである。「島夷誌略」はかかるクリップの存在についてふれていないので、當時の漁法はタミールのものと推察されるが、これはセイロン島への大食系民族進出の歴史をいますこし検討してみないと斷定はできない。またペルシャ灣系の潜水夫がノーズ・クリップによつて特色づけられてよい

ものかどうか今後の問題である。ただ既にわれわれは「桂海虞衡志」によつて宋代の支那蠻民がノーズ・クリップを使用しないことを知り、「諸蕃志」によつてアラブ系ダイバーが黄蠟で耳鼻をふさぐ<sup>註2</sup>ことも知つている。もし、かりに世界の潜水漁が

- (1) ペルシャ灣系 ノーズ・クリップないし黄蠟で耳鼻を塞ぐ
- (2) インド洋系 手指で鼻をふさぐ
- (3) 東シナ海系 鼻をふさがない？

と三つの大別がなされるとしたら、「魏志倭人傳」以来のわが國潜水漁法は一體どの系譜をひいているのであろうか。潜水に命綱、錘石、浮具等を用いることは潜水の原理から發生するものであつて、タイプの基準にはならない。そこで分類がなされるとしたら、ノーズ・クリップのごときか或いは供犧のような習俗的なものがその有力な指標として選ばれねばならない。主題から外れたが、興味あることなので附言した。

以上「星槎勝覽」にとどめられた漁事を紹介し、それが既刊書の襲用による場合が多く、かつ内容のとほしい點をのべ、それを明示するために「島夷誌略」との比較を試みたわけである。ただこの一事のみをもつてしてこの書の價值を否定するものではない。ヨーロッパ人東漸以前の西南海上の事情を明らかにするものとして、やはり重視しなくてはならぬ記録も決してすくなくないからである。

註1 Mahdi Husain: *The Rehla of Ibn Battuta*, Baroda 1953, p.198.

2 眞珠出<sub>二</sub>大食國之海島上<sub>一</sub>(中略)其採取人以<sub>二</sub>麻繩<sub>一</sub>繫身以<sub>二</sub>黄蠟<sub>一</sub>塞<sub>二</sub>耳鼻<sub>一</sub>